

日本ポピュラー音楽学会 2018 年度第 2 回関東地区例会

共創的音楽実践における参加の様態に関する研究  
：「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」の分析から

東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科修士課程

石橋 鼓太郎

本論文および発表は、多様な背景を持った人々が共に音楽を創造する「共創的音楽実践」を、「参加」という視点から分析し、その新たな意義を提示するものである。

まず議論に先立ち、序章では、共創的音楽実践の歴史的変遷を、実験音楽・不確定性の音楽、音楽教育、音楽療法、コミュニティ音楽、そしてアートプロジェクト・芸術祭などの隣接領域との関係においてたどる。その上で、近年の研究において参加者の実際のふるまいに即した分析が不足していることを指摘する。

本論は大きく 2 部に分かれている。第 1 部では、共創的音楽実践の研究にあたり適切なアプローチや理論的枠組みについての検討を行う。第 2 部では、研究事例として、2011 年度より自治体や大学、NPO 法人などの共催により行われている実験音楽の手法を用いた市民参加型の音楽プロジェクト「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」と、そこに参加する多様な音楽的背景をもつ人々からなる演奏団体「だじゃれ音楽研究会」の活動を分析・考察している。

第 1 部の理論的考察では、まず第 1 章で、参加型アートに関する近年の議論が参照される。美的価値と社会的価値を同一平面上に捉える「関係性」という前提に立った上で、それはアーティストによって事前に一義的に決められるものではなく、偶発的・不確定的に変動するものであることを指摘し、その様態を参加者の行為に即してエスノグラフィックに研究する必要性が示される。次に第 2 章では、音楽実践において立ち上がる出来事の偶発的・不確定的なダイナミズムを捉えるために、音楽学や民族音楽学、相互行為論、状況的学習論などを参照しつつ議論が進められる。事前に文化的に決められた方法により獲得されるコミュニティへの同一化や一体感を重視する従来の民族音楽学的なアプローチから脱し、参加者の行為が多層的・複数的なコンテクストと共に織り込まれた上で、他者の行為と結ばったりほどけたりすることで実践に生じる力学に焦点を当てた研究アプローチが提示される。

第 2 部の事例研究では、まず第 3 章で、2011 年度から現在に至るまでの「野村誠 千住だじゃれ音楽祭」のプロジェクト構造の変遷とそれに伴う参加者の役割の変化を概観する。だじゃれ音楽研究会メンバーの実践と主催者の決定が共に織り込まれながら、近年の活動において「参加を誘発する参加」の様態が発生しつつあることを示す。そのメカニズムを探るべく、第 4 章では、特に 2016～2017 年度の活動におけるだじゃれ音楽研究会というコミュニティの構成に着目し、その時々々の興味に即してコミュニティ間を越境する自然な関わり方が、コミュニティに参加するにあたっての障壁を低くしていることを示唆する。さらに第

5章では、実際にセッションやワークショップがおこなわれている場面における相互行為を分析し、他者の音との偶発的な重なり合いに基づき即興演奏をおこなう美的態度によって、場の枠組みが緩やかに変容し、他者の参加が誘発されていることを示す。

終章では、人類学者ティム・インゴルドの「メッシュワーク」という概念を援用しつつ、これらの分析を総括する。だじゃれ音楽研究会のメンバーは、各々が気ままに漂流するように行為しつつ、それが他者の行為と偶発的に結ばれほどけていく過程やその質感に対する享樂的な態度に基づいて参加しており、それによって他者の行為にも変化が生じ、多様な参加が偶発的に立ち上がっていることを示す。